

民生教育委員会行政視察報告書

1 視察期間

平成27年8月28日 1日間

2 視察都市

静岡県沼津市

3 参加者

加藤文重委員長、根津康広副委員長、草地博昭委員、芦川和美委員、
太田佳孝委員、松野正比呂委員、加藤治吉議長、鈴木昭二委員、岡實委員
随員 平野貴章主任

4 視察事項

- (1) 市の概況について
- (2) 小中一貫教育について(沼津市立静浦小中一貫学校)

5 考察

次のとおり

沼津市 人口：201,804人・面積：187.13㎢（平成27年4月1日現在）

1 小中一貫教育について（沼津市立静浦小中一貫学校）

(1) 概要

静浦地区では少子化が進み、小学校では児童生徒数の減少により教育的効果に課題が出始め、さらに複式学級の発生も避けられない状況であったことや、静浦中学校が山間部の中腹に位置し、落石やがけ崩れなどにより通学路や校舎の安全性に課題を抱えていた。これらを解決するため、自治会やPTAから小中一貫校設置の要望を受け、学校や地域と協議を重ね、平成22年、「沼津市教育基本構想」に基づき「静浦地区小中一貫校基本計画」を策定し、平成26年4月、新築では県内公立校で初となる施設一体型小中一貫校として開校した。

基本計画にある「ことば」「9年間の連続性」「地域」という三つの基本コンセプトは施設設計に生かしている。具体的には「ことば」の活用をねらい、校舎の2階から4階の各階中央部に学校図書館を配置することで、本をより身近に感じられる設計とし、また普通教室前には教室と同じ広さの廊下（コモンスペース）を設け、異学年の交流の場としている。校舎が海に近いので、地震や津波等の防災対策として太陽光発電や給水設備、防災倉庫等を屋上に設置し、災害後の早期の機能回復に備えている。また、長期避難生活に備えてランチルームでは太陽光発電による電気が使用可能なほか、家庭科調理室と隣接し相互に連携できるようにしている。

教育内容としては、小中9年間で1～4年生の初志部、5～7年生の立志部、8～9年生の大志部に分け4・3・2制としている。これは、国立教育政策研究所や他市の先行事例を参考に子どもの育ち（発達段階や学習内容、学習方法）を重視した区分けで、中1ギャップの解消や最上級生のリーダーシップの育成などを期待したものである。また、教職員の教育のベクトルを揃えるためのツールとして「シラバス」を活用していることや、1年生から教科担任制を導入していること、6年生の卒業式や中学の入学式がないことも特徴の1つである。

教育効果としては、集会などの際に8・9年生（大志部）は、1年生の隣に並ぶようにし、姿勢や生活態度が非常によく下級生の見本となっている。また学校図書館を中心に据えた構造であるため、朝登校すると図書館に立ち寄る児童生徒が多い。中1ギャップの解消など、異年齢交流や教科担任制の採用などにより良い効果があらわれている。

課題は小中学校の文化の違いによる教員の戸惑いや7～9年生が上下関係を学ぶ機会が少ないことなどが挙げられる。今後は市内各小中学校における連携の取り組みを積極的に進めるとともに、静浦小中一貫学校の成果を踏まえ、地域の特色や意向、学校間の距離等の諸条件を考慮しつつ小中一貫校を検討していく必要があるとのことである。

(2) 考察

子どもたちの一時的な避難生活に備え屋上スペースに物資や資機材等を備蓄する防災倉庫や災害後の迅速な機能回復に備えた電気・給水設備、自立式の太陽光発電設備、短期的な避難生活場所として想定するランチルームへ電力を供給する備えなどはよく考えた構造となっており非常に参考になった。立地場所が沿岸部、山間部の間に位置しているため、地域住民の避難を想定した複数の避難ルートを確保しているなどはこの小中学校の特色であると感じた。校舎の2階から4階の各階に学校図書館があることなど校舎の内外に様々な工夫が見られ、また段階的教科担任制や小中乗り入れ授業の実施などは、中1ギャップの解消につながると感じた。

学府一体校に関しては、議員も地域と関わっていかなければならないが、時間をかけて理解をしていただくことが肝要である。今後の教育委員会との懇談や委員会視察に活かしていきたい。